多賀神社文書　並解說

官幣大社 多賀神社々務所發行

近江國犬上郡多賀の鄕に鎭まります官幣大社多賀神社は、伊邪那岐命、伊邪那美命の二柱の大神を奉祀して古來朝野の尊崇を鍾めた靈社であり、また長壽延命を祈願して神驗彌高く、社運の隆盛は日を追ふて加はりつゝある。去秋私は當社に始めて參詣する機會を得たのであるが、この時深く私の心をうち今もなほ忘れ得ない一つの見聞をしたので、この紹介に先立つてその話を一寸披露させて頂きたい。

當社には大方室町時代末葉の製作かと思惟される繪圖があり、それは上方左右に日月を描いた曼荼羅風のもので、或は其頃信仰の對象とされたものかも知れないが、それでも社殿の結構や祭禮の模樣などを寫してゐて、當時の本社とその信仰を知る上に貴重な資料を提供してゐるのである。今その繪圖の右上方本殿と末社を含む一廓を注意されるならば、本殿の右側に細高い木臺が設けられ、その臺上に白く供米が盛られてゐて、その周りに二羽の烏が飛び交うてゐる光景に氣付かれるであらう。この如何にも珍奇な風景は、早朝神官が神前に供膳を捧げる前に、必ず庭前のこの臺上に神膳を供すると、やがて二羽の烏が現れてその供膳の毒見をする、といふ當社の古き傳承を圖示してゐるのである。これだけでも「御先食」と稱へるこの話はかなり神祕的であると思ふ。ところがこの話は決して單なる傳承ではなくして、宮司の御說明によれば今もなほ風の日も雨の日も當社の神官が體驗して居れらるといふのである。昭和八年春見事に新築造營成れるこの神殿の傍にもやはり同樣の臺が備へられてゐるが、昔ながらに毎朝神膳をこゝに供へて拍手されると、必ず番ひであらう二羽の烏が飛來してこの食膳に舞ひ下るといふのである。四百年以前の古繪圖に見る不思議な光景は、實に今も日々に多賀社に於て繰り返されてゐるといふのである。私にとつてこの話は何としても考へさせられる話であつた。

さて今回當社に於ては皇紀二千六百年の記念事業として、社藏の古文書全百三十六通をすべて印刷に付し、その內重要なもの四十通は寫眞版となし、更に全文書に亙つて精密な解說を加へて上梓せられる事となつた。高雅な帙の中に文書並解說と寫眞集の二册が優美な風姿で收められ、見るからに立派に出來上つた。卷を繙けば建武中興に於ける五辻宮の隱れたる御偉業や、吉野朝時代に於ける當社祀職の勤王、さては豐臣秀吉が大政所の重患平癒を祈る至誠など、皇國史を飾る數々の史實が次々に眼前に展げられ、畏き御神德を宛らに物語つてゐるのである。洵に神威奉讚の此上なき企畫と云ふべきであらう。

近時各地の社寺舊家の文書が次々に印行せらるゝに至り、研究上の便宜が日々に加はり行くことは誠に喜ばしいと思ふ。併し乍ら今や是等文書刊行の手法に於て、一應回顧反省すべき時期に立至つてゐるのではあるまいかと考へる。その時に當つてこの書物が負ふべき榮譽は、その方法に新機軸を示したことであらう。即

ち讀本は原本の風貌を彷彿たらしむべく極めて入念に植字し、毎一通について讀本一頁解說一頁を見開きの頁に置き、番號によつて別册の寫眞版とも對照し得るやうに工夫してある。文書の長短、解說の繁簡種々であるから、其爲に編輯に於ても、印刷に於ても誠に懇切な苦心が凝らされてゐるのである。これは編者中村直勝先生の厚き經驗と深き親切によらずして出來得べきものでは決してない。この書物が今後文書刊行一典據として、永くその價値を失はないことを私は斷言する。

最初「御先食」の話に餘り夢中であつた私は、今外裝といひ內容といひ、他の多くの類書に比を見ないこの書物を手にして、そこに何かしら相通ふ「多賀神社なればこそ」の感激を隱し得なかつたのであつた。〔林屋辰三郎〕（非賣品）

彙報

史學研究會

大會 十一月二十三日（土）、二十四日（日）の兩日に亙つて、恒例の本會大會は擧行せられた。今左にその大概を摘記する。

第一日は午後一時半より樂友會館講堂に於いて公開講演會を催し、左記の講演があつた。折から新嘗祭のよき日、殊に快晴に惠まれて會する者二百名。

一、支那古文物東方波及に就いて一二の考察　本學教授　梅原　末治氏

一、希臘人の財產觀念についての一考察　東大助教授　村川堅太郎氏

右のうち村川氏の講演は本誌本號に掲載、梅原氏の原稿も追つて本誌に掲載される豫定である。

第二日は見學日として、午前九時より市內栗田口三條青蓮院（正午まで）及び市內岡崎圓勝寺町有隣館（午後四時まで）の兩所の拜觀縱覽を行つた。

青蓮院

朝來空は曇り勝にてやゝ陰霾乍ら、秋深い京洛一日の淸遊には適はしく、まづは絕好の見學日和とて、洛東栗田口青蓮院の見學會場に集ひ來る會員の數は、定刻九時を過る頃より漸く加はつた。